



東京YMCA

2010 5月号

発行所 東京キリスト教青年会 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

東京YMCAが30年にわたりパートナーシップを結んでいる米国フロストバレーYMCAの理事長・R.Fenn Putman氏と総主事・Jerry Huncosky氏が4月、来日された。国際協力委員長の笈川光郎氏(日本語訳も担当)を交え、インタビューを行った。

(編集一広報室・小泉真由美)

笈川光郎氏：昨年は東京一フロストバレーYMCAパートナーシップ30周年記念を祝い、パーティーを行うことができました。これまでのお支えに感謝します。本日はパートナーシップやフロストバレーYMCAについてお聞きしたいと思えます。まず東京YMCAを初めて訪問されたはいかがでしたか。

R.Fenn Putman理事長：皆さんがとても良くしてください、快適な旅になりました。見学した施設はどれも素晴らしく、それぞれに違った特色を持っていますね。キャンプ場は美しい場所にあり、良く手入れ(管理)されている印象を受けました。スタッフもYMCAでの働きに献身的で、このYMCAファミリーが素晴らしいプログラムを生み出しているのだと感じました。



Jerry Huncosky総主事

Jerry Huncosky総主事：スタッフの皆さんがとても親切ですね。これまでE-Mailでやり取りをしてきましたが、お互いの

YMCAを理解することができ、今まで以上にコミュニケーションがより充実したものになると思えます。東京YMCAが複数の国ともパートナーシップを結ばれ、継続していることも深く感銘しました。社会経済が厳しい時にも、平和のゴールを目指して働き続けられることは素晴らしいです。今回、日本に来ることができて、本当に良かったです。山中湖センターでは、美しい富士山も見ることができましたし、最高でした。

笈川氏：今、パートナーシップには、東京YMCAから松本数実さんと三浦壮一郎さんがスタッフとして派遣され、ニューヨーク周辺に住む日本人の子どもたちを対象にキャンププログラム等を実施しています。子どもたちへのプログラムへの意義やあり方については、どのようにお考えでしょうか。

Huncosky総主事：東京パートナーシップ事務所のあるホワイトプレインズ地域でのプログラムは米国の中でも大成功の国際的なプログラムとなり嬉しく思っています。松本さんが果たされているリーダーシップは、ボランティアリーダーへの良い指導だけでなく、キャンプに参加する米国の青少年へも大変良い影響を与えていると思えます。

フロストバレーには、様々な人が集ってきます。身体的に障がいがある子や、人工透析が必要な子ども、裕福な家庭だけでなく、貧困家庭に暮らす子どもも来ます。そうしたいろいろな境遇や国籍の子どもたちがキャンプに参加していることが大切で、パートナーシップが高いレベルを維持していくには、そういった多様性の中にあって相互に交流を図りつつも、さらに発展させていくことが大事です。

笈川氏：そうですね。東京パートナーシップのプログラムもフロストバレーYMCAキャンプのプログラムもお互いが刺激しあいながら、発展していくのは素晴らしいですね。そういったことが新

しいプログラム生み出すのではないかと思います。何がアイデアはありますか。

Huncosky総主事：キャンプ場内に日本人街のようなものを作り、ニューヨークに住むアメリカ人が日本文化を疑似体験できるような試みはどうかと、ちょうど理事長と話していたところです。フロストバレーYMCAが大事にしているのは、育った環境や人種、文化が違う子どもたちが集うキャンプをつくることです。例えば「馬と生活を共にするプログラム」などを考えています。

Putman理事長：馬は自分の世話をしてくれる人を頼りにする特性があります。ブラシを掛けたり、足回りの世話をしたり、そういったことを通して、子どもたちはたくさんのお話を学ぶことができると考えます。キャンプ生活でキャビンをきれいにしたり、友だちを大切にすることを学んだりするのは、責任感のある子が育ちます。

そのほかに、家族向けの新しいプログラムや週末を父兄とともに過ごすプログラム等を計画したいです。



笈川光郎・国際協力委員長

笈川氏：キャンププログラム(生活)を通して人間性を養うのは、日本も同様です。子どもたちは生活する環境によって、広がりをもって成長することができるのです。そういった意味で、フロストバレーキャンプ場は豊かな自然に恵まれ、素晴らしい環境が整っていますね。環境教育も充実していると聞いています。

東京一フロストバレーYMCAパートナーシップ 育て合う心が30年の歴史を紡ぐ

Huncosky総主事：これまでも環境教育には力を注いできましたが、新たなカリキュラムも検討しています。ニューヨークの水道はフロストバレー一帯の流域にある水脈から供給されています。このことを中心とした環境教育プログラムを考えています。

Putman理事長：フロストバレーキャンプ場では400エーカーを使って森のモデルを作っています。16の区域に分け、道や木材など森をどのようにするか研究をしています。

松本数実氏：アメリカの学校教育などではフロストバレーの環境教育が取り入れられているところもあり、子どもたちをキャンプ場に連れてきて、自然と生活についての教育を行っています。鹿、リスなど野生の動物がたくさん生息していますし、森には植物もたくさんありますから。ほかにもメープルシロップをつくるシュガーハウスなど、フロストバレーキャンプ場は「自然」と「環境」について学べる絶好の場所です。



松本数実パートナーシップスタッフ

笈川氏：立地や環境を活かして、いろいろな種類のプログラムを計画・実施されていて素晴らしいですね。これまでのご経験などから、東京YMCAの野外教育事業へアドバイスをいただけたらと思います。

Huncosky総主事：私は25年のキャンプ経験がありますが、都会の喧騒から離れてキャンプ場に到着すると、何か特別な「想い」や「感慨」を感じます。自然に帰れるというか、自分が大切にされているというか、日常とは違ったものを感じます。フロストバレーYMCAキャンプ場の門をくぐると、非日常の世界に足を踏み入れたような気がします。

東京のキャンプ場・山中キャンプは整っていて、特に障がい者向けに配慮された施設は素晴らしいと思えました。施設内部もきれいで、キッチンや食堂も良いと思いましたが、山中キャンプの門を過ぎた時に、フロストバレーで感じている何か特別な空気がなかったように思います。

私は、フロストバレーキャンプに初めて来たキャンパーでもリピーターであっても、キャンプ場に着いた瞬間に、「Wow!」と思わせ感激を与えるように心がけています。そして、いつも最高の環境を提供するように努めています。

笈川氏：常に、いつもとは違う環境を整え、維持していくことは相当な努力が必要だと思います。日本のYMCAのキャンプ場も見習うべき点がたくさんあります。最後に、東京一フロストバレーYMCAパートナーシップへ今後期待することをお願いします。

Putman理事長：たとえば、アメリカの学生を日本や他の国に送り出し、母国語以外の語学の勉強をしてもらいたいと考えています。

Thomas Friedmanという人が「The world is Flat: A Brief History of the Twenty-First Century」(邦訳：『フラット化する世界—経済の大転換と人間の未来(上・下)』日本経済新聞社)という本を書いています。その中で、『地球は丸いが、今や情報の世界では、一瞬にして世界中の出来事を知ることができる世の中になっている』と書いています。お互いによく知り合うことや共に進歩す

ることが可能になっていきます。アメリカでも、日本の文化などを学ぶよう努力することはとても意味のあることで、必要なことだと考えています。具体的にどのように実現すれば良いのかはまだ分かりませんが。



R.Fenn Putman理事長

Huncosky総主事：確かに、アメリカの子どもたちを日本などに送ることで、学ぶことはたくさんあると思います。たとえば、富士登山やハイキングなど、山中キャンプや東山荘(日本YMCA同盟)を拠点として、アドベンチャーキャンプのようなプログラムを行うことは可能ではないでしょうか。フロストバレーからだけではなく、韓国などアジア地域からも参加されたら良いと思います。他のパートナーシップからも日本に集まって、国際的な交歓会などを行ったらどうでしょうか。

Putman理事長：これもちょっと実現は難しいかもしれませんが、全てのパートナーシップが日本やフロストバレーで一堂に会して、それぞれの思いや考えを交換することができたら素晴らしいでしょう。数年に1回でも実現できたらいいですね。

笈川氏：壮大で、素敵なアイデアですね。いつか実現できたら素晴らしいと思います。これからも世界平和へのゴールを目指して、パートナーシップが続くことを願っています。

妙高高原ロ
ッジに、3月
13日、17日
5日間、シン
ガポールYM
CAを通じて
6人の若者男
女が滞在さ
れ、スキーを
楽しんだ。▼雪に接する機
会のない彼らは、ナイター
にも挑戦したり、妙高ロッ
ジと温泉源の異なる赤倉温
泉の露天風呂や、餅つきを
楽しんだり、雪だてでなく、
日本の文化もちよっぴり体
験して、妙高滞在を堪能さ
れたようだ。おまけに季節
はずれの大雪で、モノト
ンの雪景色の世界にも触
れ、最高の日本滞在中になっ
たのではないかと思ってい
る。▼最終前日は、参
加者の1人で30歳代の青年
実業家(石油の取引関連)
が、「仕事の場面ではいつ
も、お金儲けの話ばかりの
毎日過ごしている。とこ
ろがここへ来たら、みんな
がゆつたりとスキーを楽し
み、お互いに助け合っ
て、まるで別世界。YMCAは
良いですね。これからは、
シンガポールのプログラム
にも参加するようにした
いと思えます」と語って
くれた。▼国を超えて、「Y
MCAらしさ」や「他者を
思いやる心」が人々の中に
創出され、ほんの少しだけ
れども、参加者の生き方に
良い影響が生まれ、妙高に
滞在してもらって良かった
と感じた。さらに参加者全
員が、また来年妙高にスキ
ーをしに来たい!と言って
帰国。プログラム運営に携
わる中で、カタリストとし
てのYMCAスタッフの使
命を改めて覚えた5日間だ
った。(妙高高原ロッジ
小林明彦)

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。